

Title	実録「庄内セミナー」の誕生
Sub Title	Documentary how the "Shonai Seminar" has started
Author	小磯, 勝人(Koiso, Katsuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.231- 238
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada 退職記念に寄せて = Zu Ehren Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

実録 「庄内セミナー」の誕生

小 磯 勝 人

羽田功先生と私の出会いは、2002年4月のこと。ちょうど大学では、文部科学省の委託研究報告書「教養教育グランド・デザイン——新たな知の創造」が刊行され、教養教育研究会でディスカッションしてきたことをいよいよ実践に移すべく準備が進められていた時期だった。当時は、並行して教養研究センターの開所準備も進んでおり、羽田先生は、初代所長として教養教育に関する研究会の継続やシンポジウムの開催、「生命の教養学」や「スタディ・スキルズ（現在のアカデミック・スキルズ）」といった新たな教育プログラムの開発、ニューズレターの刊行等々、さまざまなことに精力的に取り組まれ、ご多忙をきわめられていたと記憶している。

その際に、「センターにおけるどの活動もすべてアウトプットが非常に重要になるから、できる限り参加して内容を理解し、どのように活動内容を発信すべきかアドバイスをしてほしい」と協力を依頼され、私は研究会や会議にも参加したうえで意見や感想をも求められた。大学の関連会社とはいえ、出版会は外部組織なので、大学からの受託業務は、得てして説明を受けたうえで材料を提供してもらい制作するという一方通行の形式になりがちである。しかし、教養研究センターでは出版会をただの外部業者として扱うのではなく組織内に受容し、巻き込み、対等な立場のパートナーとして接する立場をとっていただいた。他にはほとんど例がない、非常に斬新で独特かつ画期的な発想にもとづく対応に身の引き締まる思いがし

たことを覚えている。

「庄内セミナー」については、さらに一歩進んでプログラム開発の段階から関わる機会をいただいた。「慶應のキャンパスは日吉、三田、矢上、信濃町、湘南藤沢、芝共立のほか山形県鶴岡市にもタウンキャンパスがあるが、そのことを学生はほとんど知らない。鶴岡は自然と文化、歴史に恵まれ、日本海、庄内平野、出羽三山が織りなす小宇宙。ここをフィールドにし、“生命”を総合的に考えることをテーマにした教養セミナーを実践したい」。羽田先生のこうした発案は、セミナー実施に向けて2007年12月25日に鶴岡に足を運ぶことから動き出した。思い返せば、その年のクリスマスは一日で即身仏を3体拝むなど、相当ハードかつ変わった旅程をこなしていたのだが、これが「庄内セミナー」というひとつのプロジェクトのスタートになったわけだ。

そもそも、「庄内セミナー」とは

教養研究センター主催の「庄内セミナー」は、2008年度に「鶴岡セミナー」としてスタートしている。2018年でちょうど10年の節目を迎え、これまでに267名が参加した（数名のリピーターがいるので延べ数）。羽田先生はプロジェクトリーダーとして、セミナープログラムの企画開発を担うプログラム・オフィサーであり、プログラムの遂行に責任を持つディレクターであり、さらに学生に対峙するインストラクターであるという、いくつもの役割を担われ、もちろん他のスタッフの方々のサポートがあるにせよ、八面六臂の活躍をされてきたことは言うまでもない。

毎年同セミナーの報告書が刊行されているが、その趣旨・目的とは「とかく座学に傾きがちな学びを、実際に身をもって体験することで身に染みこませること、また座学だけでは学ぶことの難しい分野・領域を実体験することの重要性を強く意識している」こと、「日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びのフィールドを広げること」、「出羽三山を背後に控え、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた鶴岡キャン

表 「庄内セミナー」の実施内容

	実施期間	おもな訪問先, フィールドアクティビティ	参加 者数	宿泊先
鶴岡セミナー	2008.8.31 ～ 9.3	正善院黄金堂, 羽黒山, 荒沢寺, 注連寺, 本明寺	22	月山荘
第1回庄内セミナー	2009.8.31 ～ 9.3	松ヶ丘開墾場（農場での農業体験含む）, 羽黒山, 致道館	23	東北振興研修所
第2回庄内セミナー	2010.8.31 ～ 9.3	蛸満寺, にかほ市象潟郷土資料館, 羽黒山	23	眺海の森さんさん
第3回庄内セミナー	2012.8.31 ～ 9.3	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	41	いこいの村庄内
第4回庄内セミナー	2013.8.30 ～ 9.2	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	34	休暇村羽黒
第5回庄内セミナー	2014.8.28 ～ 8.31	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	30	休暇村羽黒
第6回庄内セミナー	2015.8.28 ～ 8.31	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	17	休暇村羽黒
第7回庄内セミナー	2016.8.29 ～ 9.1	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	27	休暇村羽黒
第8回庄内セミナー	2017.8.29 ～ 9.1	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	27	休暇村羽黒
第9回庄内セミナー	2018.8.29 ～ 9.1	羽黒山, 注連寺, 松ヶ丘開墾場, 致道館, 先端生命科学研究所	23	休暇村羽黒

パスをフィールドに、存分に心と体と頭を使いつくすプログラムを学生たちに体験させること」であると述べられている。つまり、同セミナーは、前述の教養教育研究会がまとめた「教養教育グランド・デザイン——新たな知の創造」に記されている「身体知」の実践プログラムのひとつでもある。

上表に各回の実施期間、おもな訪問先・フィールドアクティビティ、参加者数、宿泊先を示した（詳細については各回の報告書をご参照いただき

たい)。ご覧のように、第4回以降は宿泊先を含め、訪問先・フィールドアクティビティの内容がほぼ固定化してきているが、そのプログラム内容を簡単に紹介しておきたい。

まず最初に、参加学生はマインドマップを作成することを通じて自己の生命観をあぶり出す。そして、即身仏拝観や修験体験（図1）等のフィールドアクティビティを通じて庄内の地に根づく生命観を体感し、先端生命科学研究所で未来に向けた研究の現場を見学。「生命」というテーマに向け、新旧両側面からのアプローチを図り、最後に再度自己の生命観を振り返る。セミナーは3泊4日で開催され、連日8時ごろから22時近くまでセッションが続けられるのだ。

参加した学生のほとんどが満足するプログラム

毎年、学生はいろいろな動機をもって参加してくる。「ほとんど無料で鶴岡まで行けるので」「就職活動が終わったが、大学生活を振り返ってみたら特段何もしてきていないので」といった思い出づくり派から「修験体験をしてみたかったので」「即身仏を見てみたかったので」といった体験希望派、「生と死を考えることで、自分を見つめ直したかったので」「ふだんは『生きるって何だろう』など友だちと話せないが、このセミナーに参加すれば語り合えると思ったので」といった真面目な哲学派まで、実にさまざまである。

そうやって参加した学生たちは「庄内セミナー」をどう捉え、どう感じたのだろうか。毎年のアンケートを見てみると、その満足度はほぼ100パーセント。「自ら手を挙げて参加してきた学生だから」という面を差し引いて考えても、これほどまでに満足度が高いのである。

「即身仏を見て圧倒された」「修験体験をしながら、自分が活かされていることを実感した」「講演で聞くことと実体験することが組み合わせられていて、体を通して学ぶことができた」等々、まさに当セミナーの趣旨・目的である「身をもって体験することで身に染みこませること」「未知の



図1 白装束をまとって行う修験体験。月山を源流とする水は、真夏でも冷たいが、滝行を終えた学生たちの表情はみなすがすがしさであふれている。

ものに出会うことで学びのフィールドを広げること」が実現されているのである。

プログラム開発の裏側

「庄内セミナー」のプログラム開発がどのように行われ、プログラム・オフィサーとして羽田先生がどのように立ち振る舞われていたかについて証言しておきたい。

まずは、資金繰りについて。セミナーの実施には、予算獲得が必須であり最初の一步であろう。そのための具体的な行動がどうだったかについてその詳細は知る由もないが、予算の出所がこれまでに塾内の「調整予算」から「未来先導基金」、「経常費」と3度も変更になっていることを見れば、予算獲得に費やした時間・手間が相当なものだったと推測できる。さらに、スタート当初は鶴岡三田会や酒田三田会、あるいは地元有力企業の会長や

社長とも面会し、寄附のお願いに奔走されていた姿を間近で見えてきた。企業においては、新規事業の推進を決定する指標は収益や採算といった数字となる場合がほとんどだが、大学においては教育効果など明確になりにくい指標とならざるを得ない。その点を丁寧かつ熱心に説明し、直談判されてきたのだ。

次に、プログラムの企画開発について。前鶴岡市長の榎本政規氏がおっしゃっていたことだが、「全国の首長会議等で『庄内セミナー』の話をする、どこの市長さんも興味をもち、皆にうらやましがられる」のだそうだ。1～2年目はそれぞれ4回ずつ庄内に事前調査・事前打ち合わせに足を運び、地元の方々と交流を図って信頼を得てきた。そして、地元の方々のアドバイスに耳を傾けプログラムを再構築するなど、入念な準備と柔軟な対応力をもってつくり上げたプログラムなのだから、独自性・卓越性があるのも当然かもしれない。さらに、学生たちの万一の事態をも想定したきめ細やかな配慮と危機管理能力をも備えているのだから、他には真似のできない内容であることは間違いない。

最後に、情熱とパワーについて。「庄内セミナー」は体力勝負と言っても過言ではない。早朝から22時近くまでセッションが設けられ（八朔祭の見学を行う日は、ホテルに戻るのが0時過ぎ）、その間ずっと学生と向き合っていなければならない。セミナー開始の3年目までは最終日に学生にプレゼンを課していたこともあり、深夜にまで及ぶ車座になってのディスカッション。夜もほとんど眠れないので当然、極度の睡眠不足となり、しかも学生とは雑魚寝状態。さらに、フィールドアクティビティでは羽黒山の石段2446段を登り下りしたり（図2）、庄内論語の素読の際は正座を強いられたり……。またプログラム開発の段階で、羽田先生は強い心意気をもって庄内を学び、体感するというスタンスを一貫して取られた。たとえば、出羽三山（月山・湯殿山・羽黒山）と鳥海山を登山で制覇したり、地元の方々と夜遅くまでお酒を酌み交わしたり……。そうした相手の懐に入って行くスタンスこそが、信頼を勝ち取り、プログラムの成功につなが

ったのだと思う。このセミナーを立ち上げたときの羽田先生の年齢が50歳代半ばだったことを考えると、その情熱とパワーに驚かざるを得ない。

「庄内セミナー」のこれから

羽田先生が産み落とした「庄内セミナー」も今年ではや10年。こうしたセミナーを継続していくには個人の方だけではなく、組織として取り組んでいくことが必須となろう。教養研究センターに理解を深め、スタッフを統率し、熱意をもって同僚・後輩を巻き込んでいくからこそ継承していけるのだと思うが、それは得てして非常にたいへんだし、難しい。

実は、立ち上げから常に先頭に立って引っ張ってこられた羽田先生が体調を崩され、2014年から一時プログラムを離れた。そして、2018年再びプロジェクトリーダーとして復帰されたのだが、18年はあいにく天候に恵まれず、連日雨模様。修験体験の日の予報が大雨だったこともあり、予定どおりにプログラムを実施できるかどうか難しい状況におかれた。そのなかで情報収集に奔走し、「修験体験は一部プログラムを変更して実施」「八朔祭の見学は中止」「その時間をグループワークにあてる」というふうにより的確な状況判断と決断を下され、改めて「庄内セミナー」における羽田先生の存在の大きさを再認識した次第である。

これまでに参加した267名の学生たちは、この「庄内セミナー」の経



図2 羽黒山の石段登りは体力勝負。石段の幅も狭いし、傾斜もきつい。登りもつらいが、とくに下りは足腰にこたえる。

験をどのように捉え、どのような思い出にしているのだろうか。参加した学生同士が結婚したという話や、同期会を開催しているという話も耳にする。セミナーに参加して庄内が気に入り、その後も何度か鶴岡を訪問したという学生もいるという。また、セミナーの帰り際に「こちらで就職したい」と言って鶴岡タウンキャンパスの職員に相談する学生も目にしてきた。少なくとも、みな庄内（鶴岡）のファンになっていることは間違いない。

羽田先生のご退職後も、これまで同様、「庄内セミナー」は引き継がれて実施されていくことだろう。羽田先生の庄内に寄せる思いは、実績として参加した学生たちにしっかりと受け止められ、受け継がれ、定着しているし、セミナーを共にしてきた教養研究センターのスタッフにも深く浸透しているのだから。

- * 「庄内セミナー」報告書は、教養研究センターのホームページから閲覧可能。また、2014年度に制作した同セミナーの映像も公開されている (<https://www.youtube.com/watch?v=oP19SN62klQ>)。